

## 「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」事業について

### I 地域ぐるみこころの教育推進事業

児童生徒の健全育成のため、学校、家庭、地域社会が一体となって取り組む

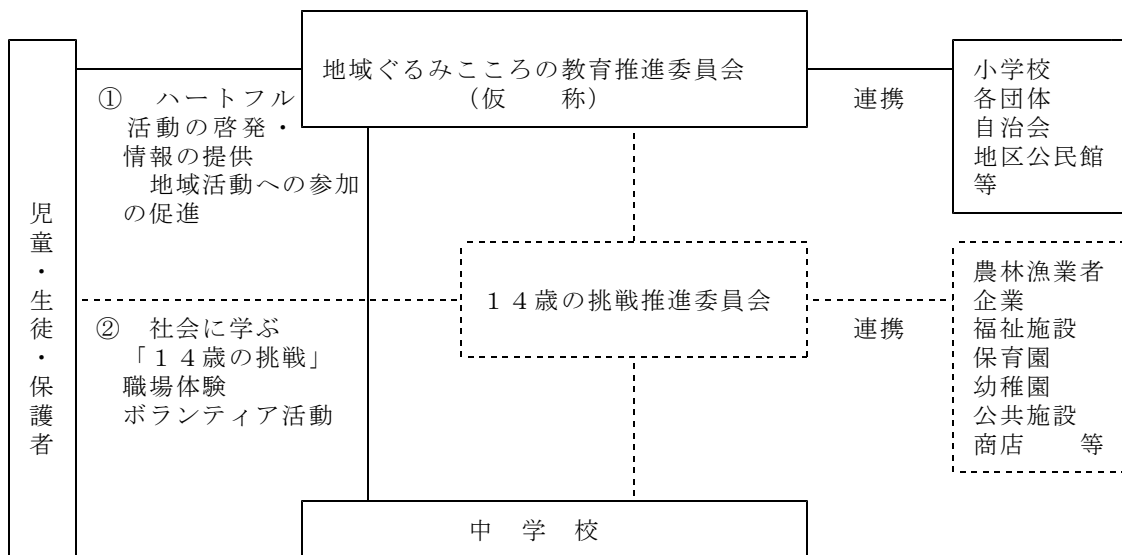
#### 1 地域ぐるみこころの教育推進事業

##### (1) 趣 旨

地域の教育力を高め、小・中学生のこころの教育を総合的に進めるため、全中学校区に「地域ぐるみこころの教育推進委員会（名称は各校区で決定）」を設置し、地域の諸団体等と連携した地域参加活動を促進するとともに、子どもたちが成長期の課題を乗り越えるたくましい力を身につけることができるよう、県内すべての中学校で、2年生を対象に体験活動を行う。

##### (2) 実施体制

【各中学校区】



#### 2 ハートフル活動推進事業（中学校長会に委託）

※ 「地域ぐるみいじめ防止事業」（平成8年度～10年度）、「中学校区こころの教育ネットワーク活動」（平成11年度～14年度）を発展させたもの

##### (1) 「地域ぐるみ心の教育推進委員会」の設置

中学校区単位で、小・中学校が中心となり、PTAをはじめとする社会教育団体、関係機関などの協力を得て「推進委員会」を設置し、校区の生徒指導に関する情報交換や児童生徒の健全育成の方策等についての協議を行うとともに、保護者と小・中学生の地域活動への参加を促進するための情報提供等を行う。

##### (2) 学校が、家庭・地域と協力して行う活動の推進

小・中学生の心の教育を総合的に進めるため、小・中学校が連携して体験活動を推進したり、地域住民の協力を得てボランティア活動に取り組んだりする。内容については地域の実情に応じて創意工夫する。

### 3 社会に学ぶ「14歳の挑戦」事業

中学2年生が、職業体験やボランティア活動等を通して健全に育つよう、5日間の体験活動を設定する。

年度	参加校	参加生徒数	受入事業所数	備考
平成11年度	27	3,318	938	1/3で実施
平成12年度	63	7,909	2,372	2/3で実施
平成13年度	85	10,668	3,362	県内全公立中学校で実施
平成14年度	85	10,561	3,335	
平成15年度	85	10,295	3,302	
平成16年度	83	9,910	3,241	

## II 「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」事業

### 1 事業誕生のきっかけ

#### ① いじめ・不登校等の増加



#### ② 地域ぐるみいじめ防止事業（現 ハートフル活動推進事業）の推進 地域の子どもは地域で育てようという気運の醸成を図る。



#### ③ 「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」事業の実施

### 2 事業の趣旨

行動領域が広がり活動が活発になる中学2年生が、1週間、学校外で職場体験活動や福祉・ボランティア活動等に参加することにより、規範意識や社会性を高め、将来の自分の生き方を考えるなど、成長期の課題を乗り越えるたくましい力を身につけることができるようにする。

### 3 事業の概要

中学2年生が、5日間学校を離れ、中学校区を中心とした地域社会へ出て、商店、企業、福祉施設等、地域の様々な方々の協力を得て、職場体験活動や福祉・ボランティア活動等を行う。

#### (1) 実施時期

教育課程上は教育計画に位置づけ、特別活動または総合的な学習の時間を中心に各学校や地域の実情を踏まえ、弾力的に実施している。

- ・ 市町村によっては、市町村内の中学校が同時期に実施し、複数校の生徒で班を組むこともある。
- ・ 平成17年度においては、早い学校は、5月9日（月）より開始し、遅い学校は、10月28日（金）で終了する。
- ・ 夏休み期間は、実施していない。

#### (2) 班編制

1班4人程度で実施することとし、班ごとに指導ボランティア1名を充てる。

#### (3) 活動場所

生徒の興味・関心をもとに、地域や学校の実態に応じて、活動内容を創意工夫する。農家、魚市場、森林組合、警察署、消防署、市役所（町村役場）、建設会社、ゴミ処理場、工場、パン屋、寿司屋、食堂、スーパーマーケット、コンビニ、保育所、幼稚園、放送局、

新聞社、石油スタンド、ホテル、老人養護施設、病院、博物館、美術館 等

(4) 移動方法

- ・ 活動期間中は、自宅からそれぞれの活動場所へ通う。
- ・ 特別な配慮を要する生徒については、その実態に応じて参加形態等を工夫する。

(5) 推進体制等

事業の実施に当たっては、教職員、保護者、地域の様々な団体のリーダー、受け入れ施設の関係者等による「推進委員会」（「地域ぐるみ心の教育推進委員会」が中心）を組織し、万全の体制で企画・立案を行う。

ア 推進委員会

学校が調査した生徒の希望等にもとづき、実施時期・活動場所・活動内容等の選定や指導ボランティアの確保等に当たる。

イ 中学校

生徒の希望や保護者の思いなどを踏まえて、推進委員会に活動内容等についての希望を提出し、調整を図る。

ウ 指導ボランティア

保護者や地域の人々、受け入れ施設の関係者等が、指導ボランティアとなり、生徒の活動を支援するとともに、生徒の活動状況等を把握し、学校との連絡等に当たる。

(6) 生徒の安全の確保について

学校は、推進委員会と連携し、安全管理に万全を期すこととする。

① 危険を伴う活動への配慮について

「推進委員会」は、本事業実施に関する様々な判断や調整をするうえで、教育的配慮の必要性や危険性についての判断、また、それに対する対策等を講じるなど、極めて重要な役割をもっている。しかし、その判断や措置等で困難な問題が生じた場合は中学校を通じて市町村教育委員会の指導・助言を受けるものとする。

② 事故発生時の緊急体制の確立について

ア 事故防止については、教職員・生徒・受け入れ先・指導ボランティア等に事前の指導を徹底するなど、「推進委員会」において、緊急体制の確立を図る。

イ 事故発生の場合は、「望ましい学校運営のため 一事例に学ぶ危機対応」等を参考に、遺漏のないよう対応する。

③ 事故が発生した場合の保険等の加入について

生徒の災害については、日本スポーツ振興センター法による給付が受けられるが、万一の場合に備えて、県が紹介する保険等に加入する。

(7) 予算について

- ① 市町村が実施する事業に対して、県は2分の1以内を補助する。
- ② 広報用パンフレットは、県教育委員会で作成し、配付する。

4 事業の特色

- ・ 生徒にとっては、職場での大人とのふれあいにより、あいさつの必要性、相手への思いやりの心、規範意識の大切さなどに気づくことができる。また、体験先の人々の仕事ぶりから、働く父母の姿を感じ取ることができる。
- ・ 地域の人々にとっては、中学生の実態を見つめ、地域の子どもは地域で育てようとする輪を広げることにつながる。
- ・ 教師にとっては、生徒の新しい姿を知ることになる。また、職場へのあいさつ、打ち

合わせ等で職場の様子を知り、視野を広げることにつながる。

- ・ 保護者にとっては、親子の話し合いの場が増えるとともに、子どもの成長ぶりを実感する機会となる。
- ・ 生徒にとっての挑戦だけでなく、教師や保護者、地域社会にとっても挑戦事業となる。

### Ⅲ 成果と課題

#### 1 成果

<生徒にとって>

##### ○ 勤労の意義や喜びの実感

- ・ 体験活動に取り組み、やり抜くことを通して、仕事の厳しさやつらさを感じるとともに、汗を流すことのさわやかさや成し遂げたときの喜びを味わい、勤労の意義について考えることができた。
- ・ 日ごろ気づくことのなかった父母の苦労を実感することができた。

##### ○ 生き方を考える機会

- ・ 事業所等の職員の方々の働く姿から、仕事に対する情熱や責任感を感じるとともに、話し合いなどから仕事や生き方に対する考えを聞くことができた。また、自らの人生や生き方について深く考えるようになった。
- ・ この体験活動が、指導ボランティアや家族などに支援され、守れながら行われていることを実感し、感謝の心が育った。

##### ○ 体験の意味づけと生活化

- ・ 道徳の時間や進路指導の時間に、事業所等での体験に基づいた発表が行われ、話し合いが深まった。
- ・ この活動がきっかけとなり、長期欠席していた生徒が、登校できるようになった例もある。

##### ○ 規範意識や社会性、責任感や忍耐強さ等の育成

- ・ 生徒にとっての5日間は、家族や教師の保護のもとを離れ、現実の社会の厳しさや温かさの中で自らの責任のもとで取り組んだ体験であり、規範意識や社会性、責任感、忍耐強さなどを高めるよい機会となった。
- ・ あいさつや言葉遣い、笑顔等の重要性が実感でき、以後の生活に好ましい変化が見られるようになった。

<保護者にとって>

##### ○ 子ども理解の深化

- ・ 事業所等での体験が親子共通の話題となり、家族の対話の機会が増加した。
- ・ この体験を通して子どもの成長や日ごろ見ることのできなかつたよさに気づくことができた。

##### ○ 家庭教育の自覚

- ・ 子どもの教育に対する家庭の役割を自覚し、子どもの姿を見つめ、家庭の教育の在り方を考えるようになった。

##### ○ 学校教育の理解

- ・ 受け入れ先を確保するためのPTA活動や学年委員会の活動等を通して、学校の取り組みの意図を理解し、学校との連携が深まった。

##### ○ 保護者間の連携

- ・ 受け入れ先の確保など、あらゆる面で保護者が学校と一体となって取り組み、互いに連絡を取り合い協力することで、保護者間の連携が深まった。

<受け入れ先（地域）にとって>

- 中学生の理解
  - ・ これまでの「中学生は」という見方から、「○○君は」という見方で、一人一人の中学生の姿を見るようになった。
- 地域の役割の自覚
  - ・ 子ども教育の一端を担っている自覚と責任が生まれ、地域の子どもは地域で育てるという気運が高まった。
- 学校教育への支援体制
  - ・ 事業所や地域の代表等が推進委員に加わり、事業の企画・運営に当たることで、地域の学校教育に対する支援体制が整えられた。
- 職場や地域の活性化
  - ・ 中学生のういういしさや発想の豊かさ、さわやかなあいさつなどで、職場や地域が明るくなった。

<学校にとって>

- 家庭、地域と一体となった教育の推進
  - ・ 事業を実施するため、推進委員会を組織し、計画や準備から活動期間中の支援、活動後の処理と反省に至るまで、家庭や地域の協力を得ながら生徒の主体的な活動を展開することができた。
  - ・ 地域内にある諸施設との連携も図られるようになった。
- 学校の活性化
  - ・ 希望調査や班作り、事前・事後学習などを通して、生徒とのつながりを深めることができた。
  - ・ 学校全体で事業に取り組むことで教師間の連携が深まり、校内の組織も機能するようになった。
- 体験の活用
  - ・ 道徳の時間の指導や進路指導等で5日間の貴重な体験を取り上げ、生徒自らがこれからの生き方や進路について考えを深めることができるよう、指導に役立てることができた。
  - ・ わずか5日間の体験で生徒は多くのことを学び、変容した。このことから、学校教育における体験活動の重要性を確認することができた。
- 開かれた学校運営
  - ・ 事業の概要や成果を校区に知らせるとともに、生徒や教師が校区に出かけてふれあいを深めたり、校区の方々や事業所等に協力を依頼したりすることで、より開かれた学校づくりに努めることができた。

2 課 題

- ・ 複数の学校が連携して事業所の確保や活動の時期を十分に調整するなど、事業所側の都合も考慮した計画となるようにする。
- ・ 事業の意義や成果を保護者や地域の人々に周知する活動を徹底し、地域の担い手を地域が育てるという気運を高める。
- ・ 保護者等が生徒の活動を温かく見守る機会を工夫するなど、保護者との連携を生かすようにする。

- ・ 活動の事前・事中・事後を問わず教師も積極的に地域に出かけ、教師と地域のかかわりをさらに深める。
- ・ 社会に学ぶ「14歳の挑戦」事業と「総合的な学習の時間」との関連を考える場合は、それぞれの趣旨が生かされるよう配慮する。

<参考>

(調査) 生徒、受け入れ先、保護者、教職員の実態調査  
※ 回答の学校分のみ記載

A 十分にできた B だいたいできた  
C あまりできなかった D できなかった

【生徒】 (66校 6546名)

	質問の項目	A	B	C	D
1	目標を持って取り組むことができたか	3532名 (54.0%)	2765名 (42.2%)	210名 (3.2%)	39名 (0.6%)
2	家族に話したか	2234名 (34.1%)	2749名 (42.0%)	1250名 (19.1%)	313名 (4.8%)
3	指導ボランティアや地域の人と交流ができたか	3829名 (58.5%)	2355名 (36.0%)	323名 (4.9%)	39名 (0.6%)
4	1週間は充実していたか	4594名 (70.2%)	1715名 (26.2%)	190名 (2.9%)	47名 (0.7%)
5	生き方を考える機会になったか	2899名 (44.3%)	2889名 (44.1%)	639名 (9.8%)	119名 (1.8%)
6	体験後もお手伝いやボランティアに行ったか	176名	114名	67名	9名

【受け入れ先】 (59校 1734名)

	質問の項目	A	B	C	D
1	受け入れ先として取り組んでみてどうか	917名 (52.9%)	757名 (43.7%)	49名 <sup>名</sup> (2.8%)	11名 (0.6%)
2	生徒たちの取り組みはどうだったか	621名 (35.8%)	949名 (54.8%)	146名 (8.4%)	18名 (1.0%)
3	生徒たちに好ましい変化は見られたか	446名 (25.7%)	1115名 (64.3%)	157名 <sup>名</sup> (9.1%)	16名 (0.9%)

【保護者】 (63校 6103名)

	質問の項目	A	B	C	D
1	趣旨について理解したか	3070名 (50.3%)	2826名 (46.3%)	175名 (2.9%)	32名 (0.5%)
2	活動中、子どもと話し合ったか	1476名 (24.2%)	3561名 (58.4%)	973名 (15.9%)	93名 (1.5%)
3	子どもに好ましい変化が見られたか	969名 (15.9%)	3300名 (54.1%)	1663名 (27.2%)	171名 (2.8%)

【教職員】 (64校 496名)

	質問の項目	A	B	C	D
1	生徒に好ましい変化が見られたか	115名 (23.2%)	313名 (63.1%)	63名 (12.7%)	5名 (1.0%)
2	指導ボランティアや地域の方と交流できたか	176名 (35.5%)	248名 (50.0%)	66名 (13.3%)	6名 (1.2%)
3	地域社会に対する見方は変わったか	72名 (14.5%)	278名 (56.1%)	125名 (25.2%)	21名 (4.2%)